



豊田市総合野外センター
令和元年12月27日 25号

何度も記事にし、またか、と思われる方もみえるでしょうが、暖冬です。そして、年内の降雪はあるのでしょうか。記録をみると、昨年の野外センターでの初積雪は、12月28日でした。六所神社から野外センターに通じる道路にも雪が積もりました。5センチほどであったと記憶しています。

山に入り冬期作業に取り組むと、すぐに額に汗がにじみます。暖かい六所の冬、利用の方はどのようにお考えでしょうか。施設を預かる者としては、少し「物足りなさ」を感じます。六所つれづれ、本年最後の発行です。

山の子里山学級①

12月21日(土)、22日(日)の二日間にわたり、『山の子里山学級』を開講しました。

この事業は年明けの『②』につながるもので、二回の参加が条件となります。

<第1回の活動内容>

1日目【21日<土>】

○入所式(ほおのきホール)

・ 出会い、班の集い

○炭焼き準備(平十窯 FAサイト)

・ 薪運び、薪入れ

・ 点火

○夕食(どんぐり食堂)

○餅つき準備

・ 餅米ほかの仕込み

○入浴

○就寝

2日目【22日<日>】

○起床

○朝食(どんぐり食堂)

○餅つき(さえずり)

・ 餅つき、昼食

○ふり返し(ほおのきホール)

○退所式

メインは、「炭焼き」と「餅つき」です。山の生活や伝統を味わい、ふるさとのよさや山の生活の楽しさを感じてもらおう活動です。

とくに、「炭焼き」は前号で紹介したとおり、薪入れ、火入れからおよそ半月の「熟成期間」が必要です。そのため、2回の事業として計画し、令和2年1月の第2回山の子里山学級「炭出し」活動へとつながります。

参加者の活動のようすを写真を使って紹介します。

<初めまして…出会い、語らいへ>



個人的には、この場面が好きです。初対面、異年齢、別の学校という条件でつくったグループです。最初は怖々、どきどきの雰囲気ですが、話し合ううちにだんだん笑顔が見え始めます。この出会いこそ、六所の醍醐味です。

<さあ、炭焼きだ>

仲間と打ち解けたところで、いよいよメインの一つ「炭焼き」にチャレンジです。まずは、薪入れ。ところがこの薪材、なかなか重いのです。声をかけ合い、手渡して次々と窯に入れていきます。外で薪を運ぶ子、窯の中で薪を組んでいく子、役を入れ替わり、作業がすすみます。



<同じ釜の…、楽しいひととき>



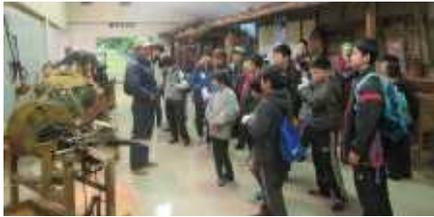
同じ釜の飯を…ということばのとおり、一日をともに過ごした子ども、大学生スタッフ、そして所員がいっしょになってタベの食卓に。何を語り合うのでしょうか。楽しいひとときです。

<気持ちをあわせて、餅つきだ>



お馴染みの餅つきです。かけ声よし、共同作業よし、の光景です。

<山の子、里山ならではの…>



野外センターの施設の中です。どこかがおわかりになる方は、野外センターです。ここは、資料館の中です。テーマの「山の子里山」体験をさらに意味づける「見学ツアー」です。

所員が説明するのは、縄ない機の使い方の実演です。二か所の入り口に藁を差し込み、足踏み仕掛けの機械を通すと、あら不思議。縄が次々と出てきます。子どもの目がきらりと輝きます。先人が知恵と試行錯誤の末につくり上げた珠玉のからくりです。

一泊二日。短い間のできごとです。しかし、経験したことや学んだことの多い時間を過ごしました。この仲間たちの再会は、1月。今現在、窯の中の火は、順調なようすです。窯の蓋を開いたとき、どんな光景が待っているでしょう。その日が今から楽しみです。

JRC豊田地区 リーダーシップ・トレーニングセンター

25日(水)、26日(木)一泊二日の日程で、JRC(青少年赤十字)豊田地区のリーダーシップ・トレーニングが開催されました。市内小中学校の児童生徒のみなさんと、指導の先生方を中

心に、総勢130名近くの方々による研修会です。



日本の「青少年赤十字」の歴史は古く、大正11年(1922年)には滋賀県の小学校で始まったとされます。

その活動の根幹には、

〇気づき

・自分の周囲を見つめ、だれが、どんな助けを求めているかに気づく

〇考え

・そのための準備、協力を考え、計画をする

〇実行する

・計画を実践する

ということがあります。

このたびの一泊二日の研修は、学校の代表が一堂に会し、活動の在り方を学び、実践の輪を市内の小中学校へ広めていききっかけづくりです。

さすがに学校を代表して参加された



みなさん。「気づき、考え、行動する」を実際の活動へ

結びつけるために、ほんとうに真剣な時間を過ごされました。



願うは、この研修が出発点となり、

実践に生かされ、福祉・奉仕の輪が大きく大きく広がっていくことです。

会場を提供させていただいた野外センター所員の思い…。助け合い、励まし合いの精神を糧に、社会のために尽くすことができるようになれば、すばらしい未来が開けると考えます。その起点になる場所として、野外センターを利用していただき、心より感謝申し上げます。私たちも、利用される方々の「幸せ」につながることをめざし、「働く」(端を楽にする)ことの意味を追究していきたいと思えます。ありがとうございました。

青少年赤十字「空は世界へ」より…。

空は世界へ つづいてる
空は世界を だいてる

幸せを求める活動が、家庭へ、学校へ、そして、社会へ広がっていくことを願います。幸せは、つながっていきます。

ご愛読、ありがとうございました

本号をもって、令和元年の発行を終了します。毎日、新鮮かつ驚きのできごとばかりでした。何より、利用の方々の笑顔が推進力となりました。

さて、野外センターには、さまざまな課題があります。その解決のために所員一丸で励みます。ご意見やご要望など、お寄せいただければ幸いです。野外センターでの活動が、みなさんの幸せにつながることを願います。ありがとうございました。

魂知和

やぶさかではない。老婆心ながら。僭越ながら。おこまがしい。及ばずながら…。やたらと大仰、時代がかったことばを使う友人がいる。それが、その場にびたりと合ったタイミングで発せられるから、おもしろい。ただし、ギャラリー中の若者は、きよとんとしている◆もちろん、ことばの背景には、その人の謙り、遠慮、思慮があつてのこと。奥ゆかしささえ感じることがある。ときと場合で単刀直入が功を奏することもあるが、このことばによつて場が和み、温かい空気に包まれるのも事実◆年寄り臭い話で恐縮だが、「イイネ」という直接表現、「マジ」という切り返し表現、「ヤバイ」という曖昧模糊表現がどうにも気になる。夜のNHKラジオに登場する役者やアイドルも頻繁にこのことばを使うから、国全体で認知されていると認めざるを得ない。ちなみに「ヤバイ」の語源は諸説があるが、用法には変遷があるようだ。八十年代頃から若者の中で「格好悪い」の意として流行し、九十年代に入ると「凄い」の意味が加わったとのこと。要は、賛否を問わず使われているのだ。やはり、曖昧模糊のことばである◆ことばは世につれ…を考えれば、謙譲の美德が風化しつつある昨今、僭越ながらなどということばが消えるのも時間の問題か。同時に、立ち止まり熟慮し、分別することも失われるか。